

〔学術論文〕

## 都市における場所の変容と関係的な場所へのアプローチ

—身体を介した関係性に着目して—

### Transformations of Urban Places and Relational Approaches to Place: Focusing on Relationships Through the Body

吉田 祐治  
Yuji Yoshida

はじめに

1. 場所の焦点化と両義性
  - 1.1 場所に関する実践の増加と問題の所在
  - 1.2 都市空間の変容と場所の両義性
2. 場所と空間に関する理論
  - 2.1 人文地理学における諸理論と関係論的な地理
  - 2.2 人間主義的な「場所」とその隘路
  - 2.3 ルフェーブルの空間論と身体

おわりに

**要旨** ローカルな取り組みや情報の増加にともない、場所が注目されるようになった。自らの居場所やアイデンティティの拠り所として場所が求められる一方、社会全体の流動性の高まりとともに場所は曖昧さを増し、捉えづらいものとなりつつある。本稿では、20世紀後半以降の都市空間の再編過程から場所が焦点化することになった背景を探るとともに、両義性を帯び定まりづらくなった場所の性格を素描する。また、人文地理学の理論的変遷を概観し、ドリーン・マッシーらによって提起された関係的な空間論及び身体が重視されるアンリ・ルフェーブルの空間論を手がかりとしながら、身体と周囲の事物や環境等との対称的な関係性から場所へとアプローチする可能性について論じる。

**キーワード**：場所、空間、身体、関係論的転回、都市空間の再編

はじめに

2000年代以降、国内各地でローカルな取り組みが増加し、メディア等で関連する情報に触れる機会が著しく増加した。地域の活性化やコミュニティの醸成などを目的としてさまざまな実践が生まれ、全国的にローカルブームと呼べるような状況が生じている。こうした傾向は、地方分権

の流れや新しい公共<sup>1</sup>の概念、地方創生<sup>2</sup>の展開、人口減少、東日本大震災による価値観の転換などをその背景としている。

地方や郊外にかぎらず、都市においてもローカルなものが注目されるようになった。まちづくり<sup>3</sup>という言葉が日常的に使用され、多様な領域やセクターと結びついている<sup>4</sup>。このような潮流のなかで、地域固有の資源に着目し、住民自らが主体的にアクションを起こすことが身近なものとなり、ローカルな実践や商品が次々と生み出されるようになった。そこではグローバリゼーションやマスカルチャーが敬遠される一方、ローカルな商品や情報は擁護され、対抗的な価値観として提示される。しかし、類似した商品や情報が溢れかえるなか、移り変わりの激しい消費のサイクルに巻き込まれずにいることは容易ではない。

このような状況と並行して、多様な実践の現場で「場所」が注目されるようになった。グローバルとローカルが対置されるように、しばしば希薄化した「空間」と濃密な「場所」とが対比される<sup>5</sup>。場所に関する言説やイメージが盛んに生産されるなか、場所は地域の固有性やコミュニティの親密さと結びつけられ、差別化される対象となった。

一方、グローバリゼーションや情報化社会の進展にともない、ローカルな実践を取り巻く環境も大きく変化した。とりわけ、開発が集中する都市部の変容は著しく、空間や場所に影響を与える要因も複雑化している。また、行政やデベロッパー、商業施設、住民など、場所に言及する主体やセクターは多様化し、場所という言葉に含意されるものも曖昧さを増している。いわば、場所に関する言説や表象がしきりに生産される一方、その内実については漠然としたイメージが先行しているのではないか。場所の実像が捉えづらくなるなか、都市における空間や場所の置かれる状況を整理し、場所をめぐる実践の有効性や生じうる課題について再検討する必要があると考えられる。

以上の問題意識に基づき、本稿では、人文地理学を中心とする先行研究や諸理論から、20世紀後半以降の都市空間の変容について整理し、曖昧さを増した場所の性格を素描する。また、意味づけによる場所へのアプローチの困難性について考察し、それとは異なるアプローチとして身体を介した関係性から場所へと接近する可能性について検討する。ローカルな実践の直接的な受け皿となる場所は、言説やイメージには汲みつくせないものを有しており、身体に着目することを通じて場所がもつ重層的な性格の描出を試みるものである。

<sup>1</sup> 人口減少やそれにとまなう税収減などにより、行政が抱えきれなくなった業務を、地縁のコミュニティや企業、NPO 等が担い、地域の実情に応じたきめ細かなサービスを提供することを示す概念（山崎ほか2021:45）。

<sup>2</sup> 2014年に策定された「まち・ひと・しごと創生法」に基づく施策の総称。地方への移住や関係人口の創出、中心市街地の活性化、都市再生など多岐にわたる分野を含む。

<sup>3</sup> まちづくりとは「地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携、協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め生活の質の向上を実現するための持続的な活動」と定義される（佐藤2017:11）。

<sup>4</sup> 20世紀後半以降、防災やコミュニティ、歴史的町並みの保存、地域活性化、福祉、環境保全など、多様な主体によるテーマ型のまちづくり活動が各地で盛んに展開されるようになった（佐藤2017:25）。

<sup>5</sup> 例えば、場所性に着目する「プレイスメイキング」の実践では、単なる物理的な「空間（space）」ではなく、人々やコミュニティにとって意味のある「場所（place）」を増やしていくことが目指されている（園田2019:10,田村2021:54）。

第1章では、人文社会諸科学で場所が焦点化する近年の動向を整理するとともに、いくつかの問題点を指摘する。グローバルなネットワークが拡張し社会全体の流動性が高まるなか、場所を求める主体も多様化する傾向にある。そのため本章では、場所が曖昧さを増し、捉えづらいものとなりつつあることについて論じる。

続いて、20世紀後半以降の都市空間の再編過程を概観し、場所が盛んに求められながらも曖昧さを増してきた背景を探る。ポスト・フォードイズム社会の到来からグローバリゼーションの進展、新自由主義経済の拡張といった過程を経ながら、都市空間は絶え間なく再編されてきた。場所は、こうした都市空間の再編過程やそれを引き起こす資本の機制とも深く関わりあうものであることについて述べる。

第2章では、場所や空間に関する人文地理学の理論について考察する。20世紀後半以降、人文社会諸科学の各分野は「文化論的転回」「物質論的転回」「関係論的転回」といった複数の転回を経験しており、人文地理学も例外ではない。そのため本章では、まずこれらの複数の転回に触れながら理論的な変遷を概観する。続いて、人間主義的な場所論とルフェーブルの空間論を比較、考察する。イーサー・トゥアンやエドワード・レルフに代表される人間主義地理学では、場所は人間の主観的（あるいは間主観的）な経験世界に基づいて意味づけられるものであり、固定的で領域的な性格を有している。これに対し、アンリ・ルフェーブルの空間論では、三つの次元（空間の実践、空間の表象、表象の空間）の弁証法によって関係的、動的に空間が生産される。身体が重視されるルフェーブルの空間論とドリーン・マッシーらが提起する関係的な空間論を接続し、身体を介した関係性をもたらす「生きられる経験」から場所へとアプローチする可能性について考察する。

地域における実践が多様化するなか、グローバルに対抗するローカルという図式が人口に膾炙して久しい。しかしながら、ローカルなものは均質的で画一的なグローバリゼーションとは異なる性質を有することが前提とされ、そこで生じる経験の質について問われることは少ない。一方、グローバルな資本が要請する商品や空間はますます多様化しており、ローカルな差異もその一部として組み込まれている。ローカル性が探求されるほどイメージは浮遊し、既知の経験に取り囲まれ、「生きられる経験」から遠ざかってしまうようなジレンマが生じている。身近な領域にも商品化の契機が忍び込み、地域における生活や空間が変容するなか、ローカルな実践の足場を問い直すことが必要とされるのではないか。以上の問題意識に基づき、本稿はリアリティを喪失しつつある都市への手がかりとして、ローカルな実践において生じる身体を介した関係性から「場所」についての再考を試みるものである<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> 場所に関する実践は都市に限定されるものではないものの、資本主義経済と密接に結びつき、より顕著な変化がみられることから、本稿では主に都市における空間や場所について論じる。なお、「プラネタリー・アーバンゼーション」と呼ばれる近年の都市研究においては、都市と農村の二項対立的な構図が疑問視され、従来の「高密度の都市化」に加えて「広範囲の都市化」の研究が重要視されている（平田 2021:14）。惑星規模で都市化の契機が拡大し、都市そのものの境界が不明瞭となるなか、本稿における議論の該当範囲についても検討の余地があると言える。

## 1. 場所の焦点化と両義性

### 1.1 場所に関する実践の増加と問題の所在

近年、地域において「場所」に着目する取り組みが増加している。「場」「場づくり」「居場所<sup>7</sup>」「サードプレイス<sup>8</sup>」「プレイスメイキング<sup>9</sup>」「プレイスブランディング<sup>10</sup>」など、場所に関する言説やキーワードを目にする機会が著しく増加した。

そうした事例には、コミュニティカフェ<sup>11</sup>や地域の茶の間、フリースクール<sup>12</sup>など、既存の施設や制度の枠組みでは対応できない課題に対応するために住民自らが開いた場所（田中 2019）や、人々の多様な活動の受け皿となりながら地域の個性を顕在化させるための公共空間の再生（園田 2019）など、多様なものがある。すべてを一括りにして論じることはできないが、そこには効率性や合理性を追求する都市では場所が失われているという共通の認識が見られ（橘 2019:24）、場所を媒介とした交流空間が盛んに求められるようになってきている（田所 2017:5）。

そのような傾向は、世界的にみられるものだとされる。先行きの見えない不安感が増大するなか、自らの居場所やアイデンティティの拠り所として場所が求められており、不透明な時代状況を映し出している。テクノロジーの進歩によって速度が極限にまで達し、世界のどこに居ても同じようなモノや情報を容易に入手できるようになるところ、空間は滅失するどころか逆説的に多様な空間や場所が希求されるようになった（町村 2007:197）。

一方、グローバル化の進展に伴い、社会関係と場所の結びつきにも変化が見られる。情報通信技術や移動交通技術、金融システムやメディアの発達、国境を越えたネットワークを著しく増大させ、場所との関わり方を多様化することになった（田所 2017:20）。場所は瞬時に、あるいは偶発的に、人、モノ、情報、イメージなどと結びつき、その都度見出されることになる。例えば、ソーシャルメディアによる偶然の情報拡散によって急激に注目され、観光地化する事例を思い浮かべてみると分かりやすい。領域を超えた人の交流や物質・情報の流通が拡大するなか、場所を地域固有の歴史的記憶やコミュニティにだけ結びつけて考えることは困難となりつつある（田所 2017:35）。

<sup>7</sup> 1980年代に不登校との関わりで使われていた居場所という言葉は、その後さまざまな場面へと広がりを見せ、既存の施設ではない新たなかたちの場所として「まちの居場所」と総称されている（田中 2019:10）。

<sup>8</sup> 米国の社会学者レイ・オルデンバーグが提唱した概念で、自宅や職場、学校ではない、個人的にくつろぐことができる第三の居場所のこと。

<sup>9</sup> 「都市空間において愛着や居心地のよさといった心理的価値を伴った公共空間を創出する協働型のプロセス・デザインの理念及び手法」（園田 2019:18）と定義される。国内では、2010年代後半から認知が拡大した。

<sup>10</sup> ブランド戦略や他のマーケティングツールを場所（町、都市、地域、国など）の経済的・社会的発展のために用いること（若林ほか 2018:10）。

<sup>11</sup> 普通のカフェや喫茶店と異なり、他の客や店の人との交流や情報交換が大切にされる「まちのたまり場」のこと（田所 2017:122）。

<sup>12</sup> 公教育機関以外で学び、成長できる環境として設立された民間主導の教育機関。学校に通わない・通えない生徒を受け入れる「学校以外の子どもの居場所」という性格もある（垣野 2019:64）。

また、現代の都市では、場所を求めるのは住民の側だけとは限らない。2000年代以降、まちづくりは資本主義の主流派とオルタナティブの両方の価値<sup>13</sup>を表現するものとなっており、「まちづくり」という言葉の使用範囲の広がりや曖昧さの増大が指摘されている（内田 2017:40）。同様に、場所に対する価値付与や意味づけも資本が盛んに求めるものとなっており、地域らしさの強調は都市・地域間競争を勝ち抜くための「場所のマーケティング」戦略となっている（町村 2007:228）。場所を取り戻そうとする過程そのものが、場所性を意図的に生産する現代社会のメカニズムに組み込まれており（町村 2007:227）、場所の有意性を素朴に信じることはナイーブ過ぎるように思われる。

これまで見てきたように、ある種の拠りどころとして場所が求められる反面、場所の性格は変容しつつあり、場所を求める主体も定位しづらいものとなっている。社会全体の流動性や脱領域性が高まるなか、場所も揺れ動き、曖昧さを増している。一方、交流の活性化やつながりの創出、創発性、地域らしさなど、場所に対しては依然として多義的な意味が込められており（飯盛 2021:10）、安定的で、領域的な場所が前提とされる傾向にある。

意味で充たされたものとして場所を捉える見方は、イーファー・トゥアンやエドワード・レルフらが提起した人間主義地理学に由来するもので、現在でも場所性の裏付けとしてしばしば引用されている（園田 2019:19, 若林ら 2018:45）。そこでは、「人々の活動の舞台となり空間や街への思い入れや結びつきを強化する居場所」（園田 2019:18）としての場所が重視され、均質的で計量的な空間に対置される。意味に充ちた場所は、「生きられた世界」の中心として位置づけられることになる。

しかし、現代の都市では、場所に意味を込める主体や領域の定まった場所を明確に見定めることは困難となりつつある。対抗的だったはずの場所が資本に回収されてしまうことや、グローバルなネットワークの接続具合によって場所が大きく変容することも起こりうる。意味の中心としての場所が揺れ動きジレンマを抱えるなか、場所を再定義する必要性が指摘されているのである（田所 2017:21）。

本稿では、こうした場所の現状をふまえ、都市のなかで場所が焦点化する背景を確認するとともに、人文地理学の理論を援用して場所について考察を行う。次節では、20世紀後半以降の都市空間の変容過程を追い、場所が焦点化することになった要因を探る。場所は、資本の生産過程から導かれたものでありながら、同時に、対抗的なものでもあるという両義性を帯びている。そのため本論文の以下の部分では、現在の場所の定まらなさの理由を、都市空間の再編過程がもたらす両義性として描出していきたい。

## 1.2 都市空間の変容と場所の両義性

<sup>13</sup> 例えば、不動産会社によるマンション開発においても「まちづくり」という言葉が使われる一方、環境保護やコミュニティ問題など、住民の主体的な活動においても同じ語が使用されている（内田 2017:40）。

20世紀の後半から21世紀にかけて、都市は人、モノ、情報などの集積度をますます高め、都市空間も大きく変容している。まちづくりなどにおけるローカルな実践の多くは変容著しい都市空間を舞台とするものであり、その影響下にあると言える。本節では、都市空間に大きな影響をもたらしたポスト・フォードイズム<sup>14</sup>社会の到来とグローバリゼーション及び新自由主義<sup>15</sup>経済の急激な進展を中心に、都市空間の再編過程を概観する。

1970年代以降のポスト・フォードイズム社会の到来は、都市に大きな転換点をもたらした。都市を支える産業は、製造業から金融・サービス業や卸・小売業を中心とする第三次産業へと移行し、グローバリゼーションの進展とともに国境を越えて人やモノ、情報が活発に行き交うことになる(園部 2014:9)。製造業を象徴する工場の海外への移転が進むなか、1980年代には都心部においてグローバル・シティ<sup>16</sup>が姿をあらわすことになる(サッセン 2004:244)。生産拠点が外部化される一方で、意思決定と資本取引のための機能が都市には求められ、金融業、情報産業をはじめとする高度なサービス産業の集積をみるようになった(森 2021:113)。激化する都市間競争を勝ち抜くため、そうした産業を支える人材と環境、環境整備のための投資が積極的に呼び込まれ、都市のリストラクチャリングが進展する。

国境を越えて膨大な人、モノ、情報等が行き交い、空間的な障壁が低減するのにもない、生活のペースは加速化し、都市における時間と空間の経験は大きく変容することになった。「時間-空間の圧縮」(ハーヴェイ 1999:308)と呼ばれる変化によって、うつろい易さやはかなさ、流動性、カオス、断片化といった感覚がもたらされ、都市はポスト・モダニティの相貌を帯びていく。日常生活の審美化やイメージの生産と消費の増大、都市空間のスペクタクル化等の特徴をもつポストモダンの都市では、文化消費に伴う意味づけ<sup>17</sup>が重視され(渡部 2004)、空間や場所もしきりに差異化されることになる。資本は空間内に含まれる場所のヴァリエーションに敏感になり、資本を引き付けようと場所は自らをますます差異化しようとし、都市、地域、国家のあいだで空間的競争が生じるのである(ハーヴェイ 1999:380)。

こうした都市空間の変化は、新たな資本蓄積の動向<sup>18</sup>に基づくものであった。フォードイズムのケインズ主義的社会システム(大量生産的・福祉国家的な社会システム)が行き詰まりを見

<sup>14</sup> 自動車産業に代表される合理化による大量生産・大量消費型の方式から、個別かつ少量の需要にも対応する柔軟な生産様式への移行のこと(アーリほか 2014:76)

<sup>15</sup> 1980年代以降に、ケインズ主義的な統制型の資本主義に代わって世界的に広まった経済思想・政策の潮流。規制緩和、貿易自由化、公営企業の民営化、政府規模の縮小などの政策を特徴とする(スティーカー 2010:47)。

<sup>16</sup> 金融のグローバルセンター化と企業者サービスの集積化をベースとして、都市の空間、社会、政治、文化構造に大きな転換をもたらしたとされる新たな都市の貌(レジーム)のこと。

<sup>17</sup> 文化消費の増大として現れるポストモダンの消費社会の高度化においては、文化による(意味の消費)が重視され、消費を通じた意味の世界の構築が志向される(渡部 2004)。

<sup>18</sup> 都市空間の変容要因を資本蓄積のみに帰することはできないものの、20世紀後半以降の都市空間への影響が顕著であることから、本節の以下の部分では主に資本の循環/フローに着目する。その他の要因として、例えば情報化・ネットワーク社会における新たな空間形態を「フローの空間」と呼んだマニエル・カステルは、資本・情報・労働・商品・計画や意思決定といった多様なフローが作用するものとして空間を捉えている(カステル 1999:249)。また、ハーヴェイが空間変容の要因を資本と貨幣に帰してしまうことを批判するマッシーは、エスニシティやジェンダーなど多様な要因によって空間や場所の経験が決定されるとする(マッシー1993)。

せるなか、工業生産に代わる建造環境の生産・流通・消費を資本蓄積の中心に据える「資本の第二循環<sup>19</sup>」が起こる(町村 2020:17)。都市空間の編成の中心は生産から消費へと移行し、消費・流通・投資の対象として空間の付加価値創出が図られることになった。

都市空間と資本の強固な結びつきは、多元的な投資の循環回路を生み出すことになる。都市に浸透した資本の循環回路は、生産活動に限らず、消費・文化・余暇といった社会的な生の諸局面に介入し、それらを活性化することで資本の価値増殖のための回路へと誘導する。人々の日常生活における生きられる経験(身体・時間・空間)が資本の生産力の源泉の一つとなる一方で、資本の循環回路は生きられる経験の収奪回路としても働くことになる(斉藤 2011:292)。

こうしたフレキシブルな資本蓄積は、新自由主義経済のもとで加速している<sup>20</sup>。今世紀に入り、都市空間の再編主体はグローバルな金融資本や企業へと移行し、規制緩和を呼び水として大規模な都市再開発が進展した<sup>21</sup>。都市空間においては、これまで以上に資本の循環効率が重視され、不動産の価値は資産価値から短期的なインカムゲインに基づく利用価値へと移行した(佐幸 2021:39)。国際的な金融資本との結びつきを強めた都市空間では経済合理性が重視され、建築物のボリューム増大(高層化)と凡庸化が同時的に進行することになる(佐幸 2021:37)。短期的な投資効率が優先されるなか、収入確保のための高層化、大規模化が進むとともに、コスト増大に結びつく個性的な構造物は敬遠される傾向にある。

資本の生産性によって空間が規定されるとき、生産性の低い空間は埠外に置かれることになる(佐幸 2021:50)。実体経済から乖離した再開発が加速する一方で、利潤を生みづらい空間(不動産)は敬遠される傾向にある。都市は、資本循環の恩恵が及ばない空間や領域を生み出しながらもまだらな発展へと移行し、二極化の様相を呈することになった。

以上、ポスト・フォーディズム社会以降の都市空間の再編過程を概観してきた。資本の循環過程へと組み込まれた都市空間は、場所の差異を生じさせ、差異がさらなる循環を呼び込む。一方、一層の効率性が追求される新自由主義経済下では、中長期的なスパンの差異化は抑制され、短期的な差異へと誘導される。

そのような都市空間で場所が希求される契機として、次の三点が考えられる。

一点目は、資本や権力が差異の源泉として場所を自ら生みだそうとする場合である。ここでは仮に「上からの場所化」と呼ぶことにする。他の空間との差別化を目的として、場所には資源が投下され続ける必要があり、そこには生の諸局面が取り込まれている。一方、新自由主義経済下

<sup>19</sup> ルフェーブルの空間論を発展させたデヴィット・ハーヴェイによって提起された概念。過剰蓄積の処理のため労働生産物から都市の建造環境へと資本循環が切り替わることを指す。

<sup>20</sup> 新自由主義経済下における都市空間の変容については、ジェントリフィケーションやゲイティッド・コミュニティ、公共空間の縮減などの様々な論点があげられるが、紙幅の都合もあるため、ここでは主に国内における2000年代以降の都市再生(再開発)の動向について論じる。

<sup>21</sup> 2000年代以降、バブル崩壊によって生じた不良債権を解消するため、均等発展を建前とするケインズ主義的な国土開発から、「選択と集中」を志向する新自由主義的な「都市再生」政策への転換が図られた。「都市再生緊急整備地域」に指定された国内の主要都市では、容積率の緩和と民間資本の活用によって急ピッチで再開発事業が進められ、超高層のビル・マンションの建設ラッシュが生じている(林 2020)。

においては、比較的小規模で短期的な回収が見込めるアート作品<sup>22</sup>やイベントなどへと誘導される可能性が指摘できる。

二点目は、資本や権力への反動として、住民や使用者の側から場所が求められる場合であり、ここでは「下からの場所化」と呼ぶ。均質的な都市空間において、まちづくりの一環として住民自らが個性的で親密な場所をつくろうとする事例は国内でも多く見られるものである（飯盛 2021, 日本建築学会 2019）。また、まだらに発展する都市では、資本の行き届かない領域が形成されており、空き家等の遊休資産の増加をはじめとして、場所づくりへの端緒を見出しやすい状況も見受けられる。

三点目は、上記の二方向の場所化が重なりあい、補完しあう場合である<sup>23</sup>。投資効率が重視される都市空間では、凡庸化が指摘されるように十分な差別化を行うことができず、補完する差異の源泉として「下からの場所化」が取り込まれる。一方、企業や行政との協働や総合的な地域経営を志向するまちづくり側（佐藤 2017:11）にとっても好機となるものであり、双方の場所化がズレを孕みながら重なりあうことになる。

都市における場所は、資本や権力の側からも、住民や使用者の側からも希求されるものであることを確認した。これまで双方にとっての場所は、別々の志向性を有し、相容れないものと捉えられる傾向にあった。しかし、現代の都市では「上から」と「下から」の二方向が混在し、補完しあうような局面が現れており、場所は両義性を帯びたものとなっている。

「上からの」都市計画と「下からの」まちづくりの接近とその語りにくさについては、近年指摘されるところとなっている（近森 2021）。かつては都市計画とまちづくりは対抗図式にあり、トップダウンで硬直的な都市計画に対し、住民や NPO などによる柔軟なまちづくりが対置される構図が一般的だった。しかし現在、都市計画はまちづくりを含み込み、参加・協働のプログラムを自身のプログラムへと組み込んでいる。こうした状況が、ルフェーブルによる「空間の表象」と「表象の空間」（ルフェーブル 2000:75）や、ミシェル・ド・セルトーによる「戦略」と「戦術」（ド・セルトー 1987:100）といった二項対立的な図式の失効が主張される由縁となっている（近森 2021）。

これまでに見てきた場所の曖昧さや両義性は、こうした都市や空間の変容過程から生じてきたものと考えられる。グローバルなネットワークに組み込まれた流動的な場所が、多様な主体によって語られる状況のなか、意味に充ちた安定的な場所を定位することは困難となりつつあるので

<sup>22</sup> 美術館やギャラリー以外の広場、道路、公園などの公共的な空間に設置される作品群はパブリックアートと呼ばれる。1990年代以降、都市再開発にパブリックアートが組み込まれるようになり、その後の地域におけるアートプロジェクトの源流となったことが指摘されている（宮本 2018:12）。

<sup>23</sup> 現在、再開発に際して頻繁に実施されている市民活動を伴った公共空間（道路・歩道・公園など）の活性化やオープンスペースの利活用などの取り組みが該当すると考えられる。なお、N・ブレナーと N・セオドアは、ネオリベラリズムがローカルに定位される諸相として、①国会・自治体の再編、②市場領域の再編、③空間の再編、新たな地理的不均等発展、④市民社会の再編、⑤言説空間の再編の5点を挙げ、これらの波及的な展開や相互作用により都市のガバナンスメカニズムが再編されるとしており（丸山 2010）、新自由主義経済下における場所の希求と言説化についても、複合的な要因の絡まりあいのなかでの空間再編と市民社会の取り込みと捉えることができる。



ある。

次章では、捉えづらくなった場所にアプローチする手立てとして、人文地理学の諸理論を紐解いていきたい。はじめに、場所や空間をめぐる 1970 年代以降の議論とその変遷を概観する。人文社会諸科学の影響下で生じたいくつかの「転回」に触れながら、本論で主に依拠する「関係的」な場所論やそのような議論が生じた背景について確認する。続いて 1970 年代に提起された人間主義地理学をふりかえり、その理論に対する批判や現代社会において生じうる齟齬について論じる。そのうえでルフェーブの空間論へと論を移し、身体を契機とした「生きられる経験」から場所への接近を試みる。それは、流動性を高める場所においても生じうる身体と周囲の事物や環境等との関係性に着目するものであり、マッシーらが提起する関係的な空間論とも接続しうるものであることについて述べる。

## 2. 場所と空間に関する理論

### 2.1 人文地理学における諸理論と関係論的な地理

グローバル化と空間の均質化が進展する現在、場所の復権をめぐるさまざまな議論が喚起されている。抵抗の拠点としての「場所」の希求と実践は、北と南、都市と農村とを問わず強まっているという (熊谷 2019:27)。

人文地理学のなかで「場所」をめぐる議論が新たに提起されたのは、1970 年代にさかのぼる。イーファー・トゥアンやエドワード・レルフらによる人間主義地理学では、人間存在の主観や創造性に焦点があてられ、人間にとっての場所の意味や価値が探求された (神田 2013)。内部化される意味は言語を通して与えられるものであり、場所や風景は記号やテキストによって解釈されることになる (森 2021:50)。

言語や記号を重視する視点は、記号論や構造主義などの流れを汲むものであり、1980 年代後半からの「文化論的転回 (cultural turn)」と呼ばれる潮流へとつながる。文化は、意味や価値を与える媒介であり、政治的、経済的な要因によって構成される記号のシステムと見なされるようになった。文化は自明でも所与でもなく、権力関係や社会構造などによって「構築」されるものと捉えられたのである (森 2021:64)。

「文化論的転回」は、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアル批評、ジェンダー研究などの領域を中心として進められ、人文地理学にも影響を与えるなかで「新しい文化地理学」と呼ばれる潮流を生んだ (神田 2013)。文化の政治性を問う視点は、風景や場所の意味を解釈する主体を問い直し、意味の専有にひそむ権力やイデオロギー、ヘゲモニーへと批判的に介入する。文化を記述する位置性や他者化の自明性が揺さぶられ、地理をつくりだす過程としての言説や表象が問われることになった (森 2021:66)。

言説や表象を通して他者化される植民地や女性へのまなざしは、人間中心的な図式によって客

体の位置に置かれてきた自然や物質の姿とも重なりあう。自己を確認するために要請された他者化についての問い直しは、近代が前提とする二項対立を疑問に付し（森 2021:173）、言説や表象への偏重が批判されるとともに、物質性（マテリアリティ）への回帰を生むことになった。主に2000年代以降に生じた物質性への注目は「物質論的転回（material turn）」と称され、そこでは主体/客体、精神/物質、人間/自然といった二項対立の乗り越えが図られる。言説や表象から、諸関係をつくりあげる物質の力へと関心が移行し、人間と物質との予測不可能な遭遇や混淆が論じられることになった（森 2021:193）。

人間は、言語を使用することで動物と差別化され、主体として客体を改変することを認められてきた。物質論的転回はこうした人間の特権的な地位を問いなおすものであり、身体化された行為遂行性（パフォーマンス）や人間/非人間の異種混交性（ハイブリディティ）など、ここでは主体と客体との複雑な関係性や出来事としての存在の生成プロセスを捉えることが目指される（森 2021:175）。アприオリな主客の対立構図に基づく静態的な「構築」ではなく、その都度つくり変えられ、生成変化する「関係性」が注視されることになるのである。

こうした関係的なアプローチを標榜する諸研究の潮流は「関係論的転回（relational turn）」と呼ばれる。人文地理学の領域では、ドリーン・マッシーやナイジェル・スリフトらを中心として展開されており、場所や空間を固有の領域ではなく関係的なものとして捉える点にその特徴がある。マッシーは「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」と題された論考において以下のように述べている。

…ある場所に種別性を付与するのは、ずっと過去にまでさかのぼって内面化される歴史ではない。それは、ある特定の位置で一まとめに節合された諸関係の特定の布置から構築されるという事実なのである。そのような社会的諸関係、そして移動とコミュニケーションのあらゆるネットワークを思い浮かべながら … それぞれの場所はそのネットワークが交差する、特定の、つまり唯一の点とみなすことができるだろう。換言すれば、場所の唯一性、つまりロカリティは、社会的諸関係、社会プロセス、そして経験と理解がともに現前する状況のなかで、その特定の相互作用と相互の節合から構築される … 場所は境界線のある領域としてではなく、社会的諸関係と理解のネットワークにおいて節合された契機として想像できるだろう。このように考えることで、外に向かって開かれ、ひろい世界との結びつきを意識し、グローバルなものと同ローカルなものを積極的に統合していく場所感覚が可能となる（マッシー1993:41）。

マッシーによると、「場所」は歴史によって意味づけられるものではなく、社会的・空間的なネットワークが交差する点であり、契機としてある。本質的な内部をもつと想像されてきた場所と空間の関係は、実際には多孔的で相互浸透的なものであり、場所はその都度形を変える「出来事」と捉えられるようになった（森 2021:186）。

都市や空間を关系的に捉えるアプローチの広がりには、ジル・ドゥルーズをはじめとするポス

ト構造主義的な思想や、ブルーノ・ラトゥールらが提起したアクター・ネットワーク理論<sup>24</sup>の影響が指摘されている (林 2019:278)。そこでは、自己と他者の自明性が脱構築され、「生成」「情動」「出来事」「異種混淆性」などの概念によって人間と自然や事物が相互に作用しあう「ポスト人間中心主義」<sup>ハイブリディティ</sup>の世界が描かれる (森 2021:178)。他者化に潜むポリティクスの問い直しに端を発した「新しい文化地理」は、近代性を下支えしてきた二元論を疑問に付し、自然や事物、ひいては人間が共存する地理へと道筋を拓くことになったのである。

ここまで見てきたように、人文地理学における 20 世紀後半以降の議論は、諸分野の影響を受けながらいくつかの転回を経てきた。近年の人文社会諸科学の力点は、「表象・意味・記号・テキスト・イメージ」などから「身体・物質・環境・関係性・パフォーマンス」などへと移行しており (高岡 2019)、こうした動向とも重なりあうものであったことが理解できる。場所や空間は、人間だけではなく、事物や環境と「ともに投げ込まれている」(マッシー 2014:280) 集会的な関係性として想像されることになった。

本稿では、こうした動向をふまえ、人、事物、環境の関係性から場所にアプローチする意義と必要性を提唱する。また、具体的な実践において生じる関係性を捉えるために、マッシーの議論では触れられることの少ない「身体」に着目する有効性について論じる<sup>25</sup>。この空間における身体性の重視という観点は、「空間論的転回」に大きな影響を与えた 1970 年代のルフューブルの「空間の生産」にすでに見られたものである。そのため本稿の以下の部分では、ルフューブルの空間論へと立ち戻りつつ、身体から生じるミクロな関係性から場所について考えていきたい。

## 2.2 人間主義的な「場所」とその隘路

1970 年代以降、人文地理学では計量的な空間科学に対する反発として、場所に関する議論が提起された。イーサー・トゥアンやエドワード・レル fra を代表的な論者とするこの「人間主義地理学」では、人間による価値や意味が強調されている (森 2021:49)。

無機質で、客観的な空間概念に対する違和感から出発した人間主義地理学は、人間存在の実存的な側面に着目し、「経験における意味の中心」(トゥアン 1993 : 307) として場所を理解する。トゥアンは、知覚と経験を通じて形成される人間と場所とのあいだの情緒的結びつきを「トポフィリア (場所への愛着)」と呼んだ (トゥアン 1992:160)。

トゥアンの場所論は、現象学的なアプローチによって五感や身体を通じた経験から説き起こさ

<sup>24</sup> ブルーノ・ラトゥールなどが提起する理論で、人とモノとの媒介過程をネットワークというメタファーを用いて論じるもの。近代的な二元論を批判し、人とモノを対称的に扱う非近代的存在論に基づいている (足立 2009:180)。

<sup>25</sup> マッシーの关系的、異種混淆的な場所という考え方に対しては、もともと場所の概念が把握しようとしていたはずのものを大部分犠牲にし、捉えどころのないものにしてしまっている、との批判もある (ハーヴェイ 1993:343)。また、単一のアイデンティティや凝集性をもたない場所が、権力や資本に翻弄されることなく抵抗の拠点となりうるのか、という疑問も生じる (熊谷 2013)。本論は、抽象的・観念的とも言われるマッシーの場所論 (熊谷 2019:42) に対し、それを下敷きとしながらも具体性への手がかりとして「身体」が形成する関係性に着目するものである。

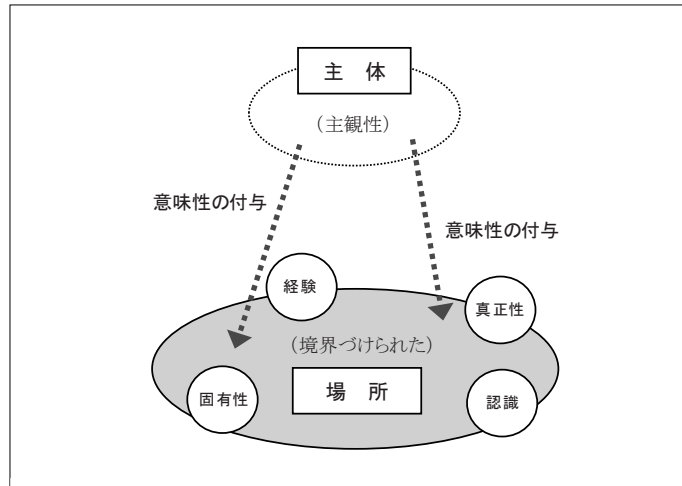


図1 人間主義的な場所のイメージ (筆者作成)

れ、主観的な構成によって多様化される。主体による経験が重視され、経験世界は感覚・感情・思考の要素で構成される。3つの要素が絡まりあい、積み重なることを通じて空間は秩序化されることになる(トゥアン 1993:21)。

レルフは、日常的な経験からなる「生きられた世界」の中心として場所を捉えた。人間であることは意味のある場所に満ちた世界で暮らすことであり、空虚な空間と対比される本物の場所が探求されることになる。本物の場所のセンスとは、「個人及び共同社会の一員として内側にいて自分自身の場所に所属すること、そのことを特に考えることなしに知っているという感覚」(レルフ 1999:165)とされ、アイデンティティの源泉とされている。

こうした本物の場所への感覚に対し、「個性的な場所の無造作な破壊と意義に対するセンスの欠如がもたらす規格化された景観の形成」(レルフ 1999:20)によって、現代社会では「没場所性 placelessness)」が進行しているとされる。産業化のなかで新たにつくり出される均質な空間が没場所性をもたらし、場所への感覚やアイデンティティが衰弱する。

人間主義的な場所論では、人間の主観的(あるいは間主観的)な経験世界や意味づけが重視されており、付与される意味は場所の本物性や真正性を裏付けるものとされる(図1)。そこでは、内側性と外側性、本物性(真正性)と偽物性といった二元論が目につき、場所を変わらぬものとして規定しようとする本質主義的態度が支配的と言える(熊谷 2019:28)。人間のまわりに広がる空間や環境は、結局のところ主観性によって内部化された意味の世界へと回収されてしまうのである。

人間主義地理学は、その後ラディカル地理学(マルクス主義地理学)やフェミニスト地理学から批判され、乗り越えが図られることになる。前者からは、主観的世界への傾倒と政治、経済など構造的要因の軽視が、後者からは、場所の本質化が男性中心的な視点であることが批判される。「意味のある場所を指定するのは誰か」という問いを端緒として、文化を構築する主体の問題と

他者化に潜むポリティクスが問い直されることになるのである (森 2021:57)。

また、現代都市における場所は、グローバルな経済や文化、バーチャルなものも含んだ情報や通信など、多様なネットワークの結節点として流動性を高めている。「空間」と対比される「場所」という二項対立的な構図は、固定的で意味性に富んだ場所を強調することにより、かえって場所に影響を与えるさまざまな機制を後景化してしまう恐れがある。フレキシブルなネットワークに覆われる現代の都市では、対抗すべき単一の相手を想定することも、不変的な場所を構想することも困難となりつつある。

しかしながら、現代においても場所には汲みつくしきれないものがあり、人間主義地理学が提起したものは依然としてその意義を失っていないと考えられる。主体性に基づく意味の世界に閉ざされた場所ではなく、事物や環境と共にあるような開かれた場所 (マッシー1993) を構想することはできないだろうか。次節では、ルフェーブルの空間論を参照し、身体を契機とした関係性から「生きられる世界」への別様のアプローチを探っていくことにしたい。

## 2.3 ルフェーブルの空間論と身体

1980年代後半以降、都市を社会的、空間的編成の諸関係から捉えていこうとする「空間論的転回」と呼ばれる動向が生じた。資本主義生産様式のグローバルな拡大に伴い、社会の流動性、異種性、複雑性が高まり、空間の自明性が揺らぐなか、空間表象と場所のありようは、既にある「領域性」から動きつつある「関係性」へと移行することになった (吉原 2022:38)。

空間論的転回の触媒のひとつとなったのが、フランスの思想家アンリ・ルフェーブルの空間論である。ルフェーブルは、空間を単なる入れ物ではなく、社会的諸関係によって生産されるものとし、「①空間的实践—知覚されるもの」「②空間の表象—思考されるもの」「③表象の空間—生きられる経験」の三元的弁証法を提示した。三つの次元がズレ・拮抗を繰り返すことにより、空間は諸関係に結びつきつつ、社会的に生産される (ルフェーブル2000:83)。こうした社会的空間で生産あるいは実践されるのは、経済的な領域に属する生産諸力ばかりではなく、人々の空間認識や身体、映像、言説、象徴などを含んだ領域にまで及ぶとされる (吉原 2022:38)。

「空間の実践」とは、社会の空間を弁証法的に提起し、分泌し、その空間を前提とするもので、日常の現実と都市の現実とを知覚される空間の内部においてネットワーク状に結びつけるものとされる (ルフェーブル2000:82)。「空間の表象」は、科学者、社会・経済計画の立案者、都市計画家、技術官僚などによって思考される空間のことで、言葉による記号の体系や、知的に練り上げられた抽象的な記号の体系へと向かう傾向にある。空間の表象は、視覚と結びついた抽象空間であり、生きられる経験や知覚されるものを思考されるものと同一視する (ibid.:82)。「表象の空間」は、映像や象徴の連合によって直接的に生きられる空間であり、住民やユーザーの空間とされる。表象の空間は、支配され受動的に経験される空間であり、非言語的な象徴と記号を伴いつつ、想像力によって空間を変革し、領有する (ibid.:83)。

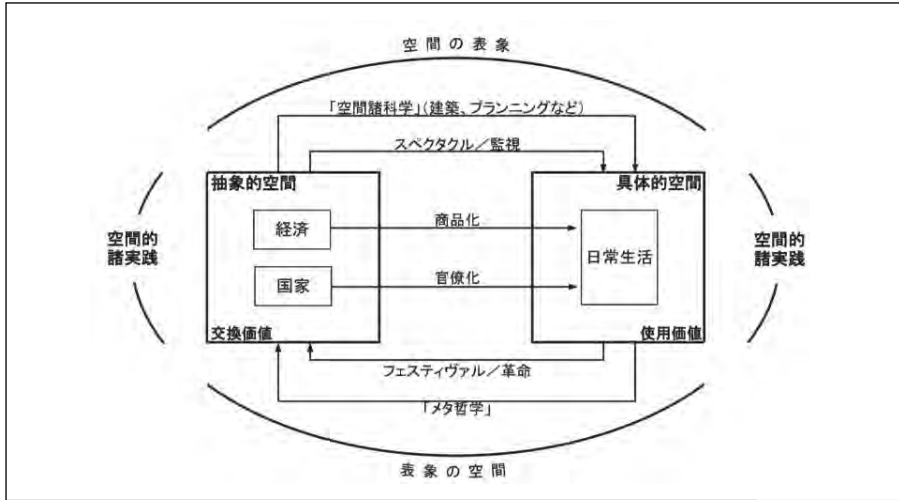


図2 グレゴリーによる権力の目 (Gregory, 加藤 2009 より再引用)

空間の生産過程には、歴史が存在し、社会と生産様式の移行を伴っている。ルフェーブルによると、宗教的・政治的性格を帯び、象徴的体系と一致していた絶対空間は、資本主義の進展とともに抽象空間へと移行した。抽象空間は、形式的で数量化され、もろもろの差異を否定する。記号や表象、イデオロギーと結びついた抽象空間は、均質的で断片的な空間をもたらし、生きられる経験を縮減するものとされる (ibid.:100)。

こうした抽象空間は、産業資本主義の世界化に基づくものであり、「空間による時間の滅却」を伴いながら近現代世界が組織化される。イデオロギーとしての「空間の表象」が全域化し、生産計画が空間化するなかで時間に対する反省的な契機は失われる (福田 2001)。こうした状況に対し、再現前であるところの「表象の空間」には、生きられたものまたは「作品」としての都市への構想力が付与されることになる。

デレク・グレゴリーは、ルフェーブルの空間の概念を「権力の目」として図式化した (図 2)。この図によると、抽象的空間を起点とした実践には空間的科学やプランニング、スペクタクルなどが該当し、「空間の表象」が割り当てられる。具体的空間を起点とした「表象の空間」には、空間の植民地化に対する抵抗の契機が見出され、空間の領有、使用価値、フェスティバルなどが重視される。

この構図において、「場所」はどこに見出しうるだろうか。一見すると具体的空間に「場所」が対応するように思われるが、先に確認したように「場所」は資本や権力の側からも要請されるものであり、抽象的空間と具体的空間のあいだで揺れ動いている。意味の世界から静態的な二項対立の構図を眺めるのではなく、関係的で動的な弁証法のさなかへと降り立ち、三つの次元の相互作用や移行を捉えていくような視座が必要とされるのではないか。

その端緒となりうるのが身体<sup>26</sup>である。弁証法的関係にある三つの次元は、それぞれ切断されるものではなく、相互的で相関的な影響力が作用しあう関係であり、領域間の関係性や移行する局面においては身体が重視される。空間と身体は不可分なものとされ、身体を手がかりとして「知覚され、思考され、生きられる身体の三重性」の弁証法的関係が説きおこされるのである(吉原 2022:110)。

抽象空間による抑圧に抗して生きられる経験を取り戻すうえで、ルフェーブルが重視するのが「差異」の概念である。身体は、空間から変容させられ、時に圧殺されるものでありながら、嗅覚から視覚にいたる諸感覚が空間に関連づけられ、差異を生じる。身体は、生産諸関係における生産行為である「能動的な身体(労働)」と、差異の領域において差異を表明する「受動的な身体(感覚)」の両面性を有し、双方を行き来しながら空間に介在する(ルフェーブル 2000:578)。

差異は、身体において身ぶりやリズムや循環を通して現れ、空間を多様化する(ibid.:551)。身体の復権は、話し言葉・声・嗅覚・聴覚の空間を復権するものであり、感覚的で官能的な空間を復権するものでもある(ibid.:522)。差異は、思考され表象されるものとして生産されるのではなく(思考される差異はすでに還元されている)、感覚的領域において誘導されるものとされる(ibid.:367)(図3)。

身体を通じた実践的・感覚的領域は、非言語的な記号と象徴の集合を伴い(ibid.:113)、「解読しうるもの一可視的なもの」(ibid.:245)や「分析し分離する知性」(ibid.:245)に先行する。生きられる経験は、思考される空間と空間の思考に先立ち、場所(トポス)をもち、空間を生産してきた(ibid.:264)。メッセージ、コード、解読、著述形式といった意味論と記号学のカテゴリーは、すでに生産された空間に応用されるものであり、現実の空間の生産を認識することはできないとされる(ibid.:241)。身体を通じた実践的・感覚的な領域には、意味や記号には還元しえないものが包摂されている。

また、現象学の諸研究においては、自我や意識に先立つ領域において身体性を介して周囲の環境等とコミュニケーションが生じていることが明らかにされてきた。こうした自覚や意識を伴わないような意識活動は、フッサールによって受動的志向性と呼ばれている(露木 2019)。受動的志向性とは、主観と客観に分岐する以前、主体が世界の中心性を獲得する以前から働くもので、意識活動の基盤となるものである。「生きられた身体<sup>27</sup>」は、知覚や認識に先立ち、それを媒介し、潜在的な領野を形成する(鷲田 2020:99)。身体は、主観性に先立って事物や環境と関係性を結び、生きられる世界を構成しているのである。ルフェーブルの空間論では現象学への言及はさほど見られないものの、能動的でも受動的でもある身体が介在することで、こうした知覚や認識

<sup>26</sup> グレゴリーもルフェーブルと同様に、抽象的空間からの解放の契機として、空間の再領有と結びついた身体に注目する。身体は、縮減することも破壊することもできない限界点であり、身体性を伴う祝祭は新たな状況を創り出すポイエーシスの可能性の場として重視される(大城 2021:331)。本論文の以下の部分では、こうした身体的実践において生じうる周囲との関係性に着目し、身体がもたらす生きられる経験が場所の重層性の一部を構成するものであること、また関係論的な視座が場所の捉え方を転換しうるものであることについて論じる。

<sup>27</sup> 三人称的な観点から物体として捉えられる身体ではなく、一人称の観点から経験されている身体の中で、行為や知覚の主体として経験されるもの(田中 2022:16)。哲学者のメルロ＝ポンティが提起した概念。

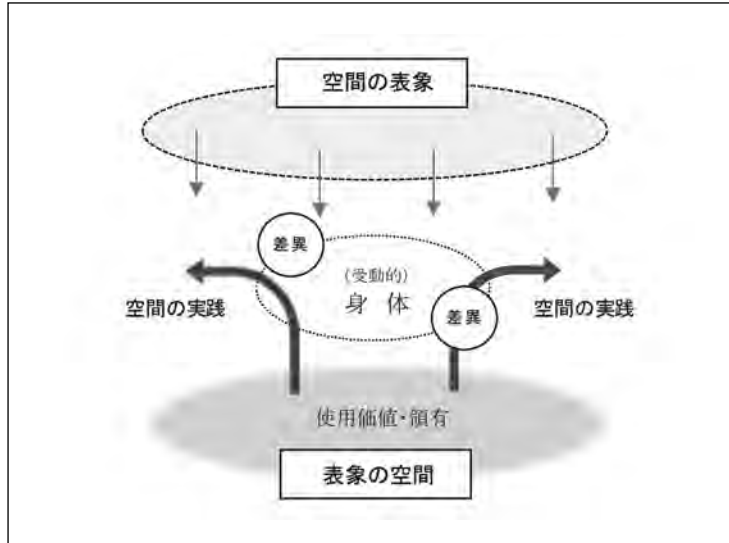


図3 (受動的) 身体を契機とした差異の生産 (筆者作成)

以前の領域へと開かれていく可能性を有している。

ルフェーブルの空間論に含まれる身体に着目することにより、身体的な経験がもたらす環境等との関係性から場所を捉えていく可能性が拓かれるのではないかと。人間主義的な場所論が空間と場所を対置し、主観性に基づく意味の中心として場所を定位したのに対し、主観にも客観にも還元しえない身体を契機として、諸感覚や行為が呼び込む事物や環境等との関係性=網状組織(メッシュワーク)(ルフェーブル 2000:206)から場所にアプローチすることが可能となる。そうした場所は、人間による意味づけを待つだけではなく、身体と呼応し、ときに働きかけてくるようなものとなるのではないかと。

ルフェーブルの空間論は、時間性を喪失した幾何学的空間への異議申し立てであり、抽象的な表象で練り上げられたデカルト以来の科学的・近代的空間の転換を企図するものであった。近代が分離した主体と客体のあいだで抽象的にまなざされてきた身体を、全体性(五感、能動と受動など)のもとで生きられる運動へと転換し(ibid.:602)、身体の多面的なリズムによって時間と空間を統合することを構想した(ibid.:302)。ルフェーブルの空間では、意識と身体が架橋され、能動でも受動でもある身体を介して空間、あるいは周囲の環境との双方向の関係性(網状組織)が取り結ばれる。こうした視座は、主客を二分し主体を特権視する近代的な世界観にはおさまりきれない射程をもつものであり、身体や物質、あるいは情動などへと力点を移す近年の人文社会諸科学の傾向を先取りするものだったとも言える。

身体を介した関係性を記述するうえでは、諸感覚に基づく知覚や認識に関する現象学や生態心理学などの知見を援用することが有用と考えられるが、詳細は別稿に譲りたい。諸感覚がもたらす身体的な関係性は、ときに意識に先立ってすでに受け入れているものであり、主客未分あるいは反転の状態をもたらすものである。主客の定まらない関係性においては、事物や環境の側に主体性が存するようにみえる場面が生じることもあるだろう。事物や環境等との対等な関係性へと



開かれた場所は、近代的な二元論の乗り越えを企図する「アクター・ネットワーク理論」や、ドリーン・マッシーらが提起するポスト人間中心主義的な視座をもつ「関係的な空間論」とも接続しうるものと考えられる。

ここまで、ポスト人間中心主義的な視座をもつ関係的な場所と、身体が重視されるルフェーブルの空間論とを重ねあわせ、身体を介した関係性から場所へと接近する理論的な可能性について考察してきた。身体は、主観的な意味づけに先立って周囲と関係性を取り結び、「生きられる経験」をもたらす。人間主義的な場所の意味づけが揺らぎつつあるなか、こうした身体的な経験の厚みは場所の探求を補完しうるものである。

話し言葉や声、匂い、音が満ち、手触りのある場所において、身体や感覚が呼び覚まされ、関係性が折り畳まれていく。最も身近な空間である身体は、多様な関係性へと開かれ、人間だけではなく非人間も含んだ対称的なネットワークの形成過程として場所や空間を捉えなおす視座をもたらしうるものと考えられる。

## おわりに

本稿では、ローカルな実践が増加する近年の状況をふまえ、生きられる経験への端緒として身体と場所の関係に着目した。ローカリズムの過熱と資本や権力による（自発性を引き出したうえでの<sup>28</sup>）取り込みが並行して進むなか、身体を介した周囲の事物や環境等との関係性へと立ちもどり、異なる角度から場所を問い直すものであったと言える。

第1章でみたように、場所の焦点化や曖昧さの増大といった近年の動向は、20世紀後半以降の都市空間の再編過程と密接に関わりあうものであった。フレキシブルな蓄積が加速するポストモダンの都市において、場所や空間は盛んに意味づけられ、商品化される。多様なフローと接続され、絶え間なく差異化される都市空間は流動的で移ろいやすいものとなった。「面」としての拡張から「点と線」の集約として捉えられるようになった都市（田中 2017:8）において、流動性を増した場所は、領域ではなくパフォーマンス的なプロセスとして現れつつある<sup>29</sup>（アーリ 2006:246）。

また、新自由主義経済下では、都市空間に対する資本のフローの影響が増大する。金融資本によって証券化・動産化され（佐幸 2021:39）、将来を先食いする都市空間では、短期的な経済効率が重視され、二極化と凡庸化に伴う空白を埋めあわせるかのように、「下から」の場所化の取り込みが進行する。

そのような状況下にあって、意味づけられた場所の探求には困難性が伴うようになった。現代

<sup>28</sup> ボランティアとネオリベラリズムの共振関係をはじめ、参加型市民社会がネオリベラリズムに従属するとの批判がなされている（仁平 2005）。

<sup>29</sup> 社会全体の移動性、流動性の高まりは、「移動論的転回」と呼ばれる人文社会諸科学の動向を生み出しており、アーリによる場所の理解はこうした動向に基づくものと言える。移動論的転回は、物質世界から独立して考え行動する人間主体を指定する人間中心主義を批判し、人間の力は常に衣装、道具、モノ、小道、建造物などの物質世界によって増幅されていると考える（アーリ 2015:71）。

の都市空間では、境界性の作用が弱まり、内と外の両方にアイデンティティが分散されるとともに、異質な素材や物質が混交する空間は常に変化の過程にある（松尾 2015）。場所を分節化・表象化し、固定化する従来のアプローチは、その実相を捉え損なうとともに、人間・非人間に関わらずそこに含まれることのない他者を常に生み出してしまふ。また、「上から」と「下から」の場所化が分かちがたく混在するなか、二項対立的な抵抗の構図の失効が指摘されている。意味づけられた客体間の差異を称揚する構造は、資本の論理と相動的なものであり、場所を物神化し、生活世界の疎遠化を招き寄せてしまいかねない。

本稿では、場所が抱えるこのようなジレンマに対し、マッシーやルフェーブルの空間論を手がかりとしながら、身体を介した周囲の事物や環境等との関係性に着目してきた。ルフェーブルは、空間の捉え方が可知性や可視性の領域に限定されてきたことを批判し、身体を契機とした非反省的で非言語的な意味作用や、日常的な実践性に伴う経験を重視する（佐幸 2021:15）。第2章でみたように、周囲との直接的な関係性に開かれた身体的領域には、意味や記号に還元しえないものが含まれ、潜在的に「生きられる世界」が構成されている。多様なネットワークのただなかで揺れ動き、資本の機制が強まり断片化される空間においても、身体は具体的な物質性や運動性と直接的に結びついている<sup>30</sup>。非人間を含む他者との出会いや交感へと開かれた身体は、空間に可変性や異種混淆性をもたらし、マッシーらが提起する関係的な空間論とも接続しうるものであることを確認した。言説やイメージなど表象化される場所が揺れうごくなか、身体は表象の向こう側、あるいはその手前にある世界（松尾 2015）の厚みを描きなおす糸口となる。身体的な実践から生じる関係性のさなかへと降り立ち、「生きられる経験」の様相を理論的・経験的に精緻化していく必要があると考えられるが、詳細は今後の課題としたい。また、見出された関係性は安定的なものではなく、空間・場所に作用するさまざまな機制の影響下にある。身体性に基づく「生きられる経験」は、場所に作用する様々なフローや意味づけと絡まりあうものであり、多様なスケールを横断しながら空間や場所におけるせめぎ合いを注視し、場所の重層性を描いていくことが必要であろう。

グローバリゼーションを背景とした均質化と平準化はローカルなものへの回帰を生じさせ（近森 2020:80）、すでに多くの実践が感覚的に選び取られている。こうした実践の現場では、都市の物質性<sup>マテリアリティ</sup>が立ち現れつつあり、関係性が仄めかされている<sup>31</sup>。本稿における議論は、ローカルな実践が抱えるジレンマへの応答の一つであり、場所に対する別様のアプローチ<sup>32</sup>を提起するもので

<sup>30</sup> ルフェーブルは、具体性を有する実践と使用（消費）にともなう地域的な性格を重視し、「交換が世界空間を占拠し、世界的規模の循環とネットワークが形成されたとしても、消費がおこなわれるのはそれぞれの特定の場所である」（ルフェーブル 2000:491）と述べている。

<sup>31</sup> 近代的な都市化が行き渡り縮小局面へと転じた都市では、「新たにつくる」ことよりも「つくったものを使いこなす」ことが求められており（武者 2022:144）、リノベーションをはじめ多くの実践において物質性に対峙する機会が増加している。こうした傾向は、モノや道具、建造環境、インフラなどが「都市的なもの」として前景化する時代状況（田中 2017:5）とも符合する。

<sup>32</sup> 近年の人文地理学においても、かつてはモダニティの権力やモラルを批判する「地理的理想力（geographical imagination）」が必要とされたが、現在は倫理や感情を構成する複雑なプロセスを理解するための「地理的感性（geographical sensibility）」が求められていることが指摘されている（森 2009）。

あった。人、事物、環境の関係性を注視し、その絡まりあいや異種混濁性<sup>ハイブリディティ</sup>を描いていくことは、近代的な(主体がつくる)都市の在り方を転換するとともに、予期せざる他者(人、事物、自然など)とともに場所を創造し、そこに含まれる時間と空間を豊かなものへと再編する可能性を有している。身体は、その端緒となりうるものである。

## 参考文献

- アーリ、ジョン 2006 年(吉原直樹訳)『社会を越える社会学 移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版社
- アーリ、ジョン 2015 年(吉原直樹・伊藤嘉高訳)『モビリティーズ 移動の社会学』作品社
- アーリ、ジョン/ ヨーナス・ラースン 2017 年(加太宏邦訳)『観光のまなざし [増補改訂版]』法政大学出版社
- 飯盛義徳 2021 年『場づくりから始める地域づくり 創発を生むプラットフォームのつくり方』学芸出版社
- 内田奈芳美 2017 年「まちづくりの国際的潮流と価値」佐藤滋・饗庭伸・内田奈芳美(編)『まちづくり教書』鹿島出版会、40-52 頁
- 大城直樹 2021 年「グレゴリーのルフェーブル『空間の生産』論」平田周・仙波希望(編)『惑星都市理論』以文社、309-332 頁
- 垣野義典 2019 年「フリースクールはなぜ居やすいか」日本建築学会(編)『まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版社、64-73 頁
- カステル、マニュエル 1999 年(大澤善信訳)『都市・情報・グローバル経済』青木書店
- 加藤政洋 2009 年「問われるストリート・エスノグラファーの方法: 都市ストリートへのアプローチの変遷: 「歩く者」と「見る者」の間で: ストリートの空間論の系譜と現在: 都市地理学を中心に」『国立民族学調査報告』80:97-132
- 神田孝治 2013 年「文化/空間論的転回と観光学」『観光学評論』1(2): 145-157
- 熊谷圭知 2013 年「場所論再考: 他者化を超えた地誌のための覚書」『お茶の水地理』52:1-11
- 熊谷圭知 2019 年『パプアニューギニアの「場所」の物語 動態地誌とフィールドワーク』九州大学出版会
- 斉藤日出治 2011 年「空間論の新しい方法基準」吉原直樹・斉藤日出治(編)『モダニティと空間の物語』東信堂、277-314 頁
- 佐幸信介 2021 年『空間と統治の社会学 住宅・郊外・ステイホーム』青弓社
- サッセン、サスキア 2018 年(伊豫谷登士翁監訳・大井由紀・高橋華生子訳)『グローバル・シティ』筑摩書房
- 佐藤滋 2017 年「まちづくりのこれまでと、これから」佐藤滋・饗庭伸・内田奈芳美(編)『まちづくり教書』鹿島出版会、9-37 頁
- スティーカー、マンフレッド 2010 年(櫻井公人・櫻井純理・高嶋正晴訳)『新版グローバリゼーション』岩波書店
- 園田聡 2019 年『プレイスメイキング アクティビティ・ファーストの都市デザイン』学芸出版社
- 園部雅久 2014 年『差異魔術化する都市の社会学 空間概念・公共性・消費主義』ミネルヴァ書房
- 高岡文章 2019 年「観光をめぐる自由と不自由—ルート観光論からのアプローチ—」『西日本社会学年報』17:7-19

- 橘弘志 2019年「まちの居場所の背景と意味」日本建築学会（編）『まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版社、23-34頁
- 田所承己 2017年『場所ですつながる/場所とつながる 移動する時代のクリエイティブなまちづくり』弘文堂
- 田中彰吾 2022年『自己と他者 身体性のパースペクティブから』東京大学出版会
- 田中大介 2017年『ネットワークシティ 現代インフラの社会学』北樹出版
- 田中康裕 2019年「まちの居場所の広がり」日本建築学会（編）『まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版社、10-22頁
- 田村康一郎 2021年「プレイスメイキングの手法としてのタクティカル・アーバニズム」泉山晃威・田村康一郎・矢野拓洋・西田司・山崎嵩拓・ソトノバ（編）『タクティカル・アーバニズム 小さなアクションから都市を大きく変える』学芸出版社、54-69頁
- 近森高明 2020年「フォレンジックスの時代 —建築家エヤル・ヴァイツマンの思想と実践」中西真知子・鳥越信吾（編）『グローバル社会の変容 スコット・ラッシュェ来日講演を経て』晃洋書房、80-97頁
- 近森高明 2021年「「都市」から「まち」へ —2000年代以降の都市記述の変容について—」『年報社会学論集』34:37-44
- 露木恵美子 2019年「「場」と知識創造—現象学的アプローチによる集団的創造性を促す「場」の理論構築へ向けて—」『研究 技術 計画』14:39-90
- トゥアン、イーファー 1993年（山本浩訳）『空間の経験—身体から都市へ』筑摩書房
- トゥアン、イーファー 1992年（小野有五・阿部一訳）『トポフィリアー人間と環境』せりか書房
- ド・セルトー、ミシェル 1987年（山田登世子訳）『日常実践のポイエティック』国文社
- 仁平典宏 2005年「ボランティア活動とネオリベラリズムの共振問題を再考する」『社会学 評論』56-2:485-499
- 日本建築学会（編） 2019年『まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版社
- ハーヴェイ、デヴィット 1999年（吉原直樹訳）『ポスト・モダニティの条件』青木書店
- 林浩一郎 2020年「リニア開発主義の構造と主体—名古屋駅西地区におけるリノベーション事業と〈草の根の新自由主義〉」『日本都市社会学会年報』30:116-131
- 林凌 2021年「出来事としての都市を考えるために —都市研究における「関係的思考」の理論的系譜とその問題点」平田周・仙波希望（編）『惑星都市理論』以文社、277-305頁
- 平田周 2021年「序 プラネタリー・アーバニゼーション研究をひらく」平田周・仙波希望（編）『惑星都市理論』以文社、3-28頁
- 福田光弘 2001年「H. ルフェーブルの「空間の生産」概念について:representationの空間的発現の両義性への考察」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』52:27-37
- 町村敬志 2007年「空間と場所」『社会学』有斐閣、197-233頁
- 町村敬志 2020年『都市に聴け:アーバン・スタディーズから読み解く東京』有斐閣
- 松尾容孝 2015年「今日の人文地理学:Tim Cresswellの近業に沿って(2)」『専修人文論集』96:133-163
- マッシー、ドリーン 1993年（加藤政洋訳）「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」『思想』933:32-44
- マッシー、ドリーン 2014年（森正人訳）『空間のために』月曜社

都市における場所の変容と関係的な場所へのアプローチ (吉田 祐治)

- 丸山真央 2010年「ネオリベラリズムの時代における東京の都市リストラクチュアリング研究に向けて」『日本都市社会学会年報』28:291-235
- 宮本結佳 2018年『アートと地域づくりの社会学』昭和堂
- 武者忠彦 2022年「都市を再生する人々」竹中克行(編)『人文地理学のパースペクティブ』ミネルヴァ書房  
143-161頁
- 森正人 2009年「言葉と物—英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開—」『人文地理』61(1):1-22
- 森正人 2021年『文化地理学講義 〈地理〉の誕生からポスト人間中心主義へ』新曜社
- 山崎義人・清野隆・柏崎梢・野田満 2021年『はじめてのまちづくり学』学芸出版社
- 吉原直樹 2022年『モビリティーズ・スタディーズ 体系的理解のために』ミネルヴァ書房
- ルフェーブル、アンリ 2000年(斉藤日出治訳)『空間の生産』青木書店
- レルフ、エドワード 1991年(高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳)『場所の現象学』筑摩書房
- 若林宏保・徳山美津恵・長尾雅信 2018年『プレイス・ブランディング』有斐閣
- 鷺田清一 2020年『メルロ＝ポンティ 可逆性』講談社
- 渡部薫 2004年「文化による都市再生と創造都市—その史的解釈の試み」『社会文化科学研究』8:109-116

